

7月30日(日) 第二礼拝 「聖書的祝福と呪い」 エレミヤ17章5-8節

この世の祝福と呪いは、この世の価値基準(成功や健康等)によって決まりますが、聖書における祝福と呪いの基準は、誰に頼るかで決まります。また、誰に頼るかにおいても二種類の人に分かれます。人間に頼る人は呪われ、神様に頼る人は祝福されるのです。

第一番目、人間に信頼することです。全能の神様は、人間を“ちり”から形造られました。“ちり”とはヘブライ語でアダマと言い、アダマからアダム(ヘブライ語で人間という意味)が造られました。聖書の中の肉(バサール)はちりからの肉なので弱く、限界があります。また、腕(ケベル)とはちりの力であり、神様から離れ、人間の力に頼る者(肉を自分の腕とする者)は、“荒れ地のむろの木”のようだとされます。この木には毒があり、死と呪いを意味します。“荒野の溶岩地帯、住む者のない塩地”とは、マルコ9:47-49 永遠に消えない火がある所(ゲヘナ)であり、塩けによって苦しめられる所なのです。フランク・シナトラの“My way”は、人間の力を称賛する歌ですが、人間を称賛することで行きつく先は溶岩地帯、塩地(永遠の滅び)なのです。

第二番目、神様を信頼することです。そういう人は、水のほとりに植わった木のように言われます。詩篇37:5「あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。」私達が主を信頼する時、主が全てを成し遂げてくださるのです。ハンジュン牧師はシンガポールの最高裁の判事と親しい関係にありました。先生は、「私は主のために、神の国のために、〇〇をしたいんです。」と言った時、その判事は彼を見つめ、「先生、このことはできません。私達は自らの力で何事もすることができないのです。」と言われたそうです。ヨハネ15:4.5 主はぶどうの木であり、私達はその枝です。私達にできることは、主のうちにとどまることだけなのです。主のうちにとどまるとは、主を認め歓迎すること、一瞬一瞬主を意識すること、自分の前に主を置くということです。主のうちにとどまる人は、水のほとりに植わった木のように、流れのほとりに根を伸ばして、暑さが来ても暑さを知らず、葉は茂り、日照りの年にも心配なく、いつまでも実をみのらせることができます。暑さ、日照りとは艱難時代のことです。黙示録には、疫病、戦争、飢饉、迫害、経済危機等…について書かれていますが、主に信頼する者は実を結び、日照りにおいても心配がありません。私達は永遠の御国に希望があるからです。

第三番目、祝福と呪いの選択です。申命記11:26「見よ。私は、きょう、あなたがたの前に、祝福とのろいを置く。」それは、主に頼り祝福を受けるのか、それとも、自分の道(呪いの道)に行くのかの選択です。私達の目の前にはいつも、いのちの木と善悪の知識の木のどちらを選ぶのかという選択が置かれているのです。神様は、私達の自由意志を尊重してください。自分の道(My way)を捨て、神様を選び、神様を私達の統治者として認めるならば、私達は本当の自由を得ることができます。本当の自由とはイエス様であり、イエス様こそ私達の道であり、真理であり、いのちなのです。アーメン！